

「固形癌治療ハンドブック」

The M.D. Anderson Surgical
Oncology HandbookDavid H. Berger, Barry W. Feig, George M. Fuhrman 編
国立がんセンター中央病院・外科 佐野 武 訳

大阪府立成人病センター・外科

古 河 洋

臨床腫瘍学，外科腫瘍学のハンドブックとして従来にない実用的な本である。現在に至るまで乳癌，胃癌をはじめとする癌治療において手術書はあっても，その効果・評価を時代に即して解説した本はあったであろうか。治療法を紹介しその善し悪しの判断は読者に任せるというスタイルがここに至って，今最もコンセンサスの得られている治療法は何かを紹介する立場に変わっている。そのためには，時代時代において治療法とその結果の検証が必要で，その過程・結果を記すには大きな“成書”ではなく，これくらいのサイズが適当であると思われる。

原典の「The M.D. Anderson Surgical Oncology Handbook」は本文440頁から成る外科腫瘍学のハンドブックで，訳者らはタイトルを「固形癌治療ハンドブック」としており，内容的にはぴったりである。序文 (Foreword) に C.M. Balch, M.D. が述べているように，執筆者は M.D. Anderson Cancer Center のフェロー (若手医師) であり，読者として同世代の医師たちを想定している。その内容は，疫学，リスクファ

クターをはじめ診断，病期分類，臨床的対応の最も重要なポイントを簡潔に述べており，主治医として大変重要な“集学的 (multidisciplinary) 治療計画”を強調している。“執筆陣に高名な先輩の名はない”が，その代わり大変柔軟で，確立されたとされるものにとらわれない生きた内容が掲載されている。

項目は乳癌に始まり，悪性黒色腫，皮膚癌と続き，胃癌，結腸・直腸・肛門癌など，更に婦人科腫瘍，腫瘍外科の緊急，栄養，薬物療法まで21項目にわたっている。各項目における頁数からみると婦人科腫瘍が最も多く，結腸・直腸・肛門癌と続き，悪性黒色腫は胃癌より多くの誌面を占めている。各項目の中では疫学，病理，診断，治療，フォローアップなどの順に述べられている。疫学では，米国の罹患率が中心であるが，胃癌や肝癌では日本および世界の状況が参考に記されている。また危険因子についても具体的に述べられている。例えば胃癌では，最近話題の *Helicobacter pylori* との関連を掲載している。

治療法の中に“実験治療”，“臨床

試験”，“phase I または II”などとタイトルされた項目や文章が目につく。これは単に治療法を紹介するのではなく，その治療法が今どの段階にあるのかを示したもので，“実験治療”ではトライアルそのものを紹介している。

また，項目ごとに診断・治療の手順のチャートが矢印でわかりやすく示されている。その手順には多少馴染めない所もある (と思われる) が，これこそこの本の主旨であり，姿勢なのだと考えられる。

これに対して，文中“訳註”として解説が加えられたものは，主として日本のデータに照らして著しく違う所を指摘したものである。これによって，“外国のデータ，考え方を単に訳した本”ではなく，日本でもそのまま役立つ生きた本に編集されているものであることがわかる。

若手医師のみならず臨床に携わる医師には一読される価値がある本である。

● A5変 頁416 図26 1996 定価
7,931円 (税込)

—MEDSi メディカル・サイエンス・インターナショナル 刊 (☎ 03-3255-5681)